

## 農産園芸研究部門

### 【作物研究室】

#### 1. 受託研究【国庫】

##### 1) カンショ有望系統の特性検定試験（平 28～）

育成機関より配付された1系統（中日本農業研究センター：1）の黒斑病抵抗性を検定した。その結果、1系統で「中」と判定した。

（森保祐仁）

#### 2. 受託研究【民間等】

##### 1) 新除草・植物調節剤適用性判定試験（昭 35～）

水稻栽培における新規除草剤の実用化試験を実施した。試験は普通期水稻で行い一発処理剤を6剤（うちジャンボ剤1剤、1kg粒剤2剤、フロアブル2剤、250g拡散粒1剤）試験に供した。その結果、4剤は実用化可能、2剤は継続検討を要すると判定した。

（松葉一樹）

##### 2) 大豆「フクユタカ」の早播き摘心栽培における狭畦栽培と除草剤土壌混和処理の組み合わせによる帰化アサガオ類を含めた雑草に対する防除効果の検討（令 4）

大豆「フクユタカ」の早播き摘心栽培において、狭畦栽培とトレファンサイド乳剤土壌混和処理を組み合わせた栽培体系でのホシアサガオに対する防除効果を検討した。狭畦栽培とトレファンサイド乳剤土壌混和処理を組み合わせた栽培体系でのホシアサガオの防除効果は、慣行条間の中耕培土栽培とエコトップP乳剤土壌散布処理を組み合わせた栽培体系と同等であった。

（松葉一樹）

##### 3) 水稻「にこまる」のリモートセンシングによる生育診断技術の開発（令 3～4）

水稻品種「にこまる」についてリモートセンシングで得られたNDVI値と生育や収量の関係を検討した。

その結果、幼穂長約2mmの生育ステージにおける生育量、窒素吸収量、NDVIを得ることができた。さらに、幼穂長約2mm期のNDVIと生育量、窒素吸収量との関係を明らかにし、穂肥前生育診断においてNDVIは生育診断の指標となることを明らかにした。

（森保祐仁）

##### 4) 水稻「にこまる」の環境負荷がかかりにくい施肥法の開発（令 4～5）

水稻栽培における被覆資材を用いた基肥一発肥料は、環境への影響が懸念されているため、環境負荷が少ない代替肥料を用いて栽培試験を実施した。その結果、JコートSFは慣行のLPS120と同様な溶出推移であり、収量品質も同等であった。一方スーパー1Bでは、出穂期までに82%が溶出し、その後溶出が停滞し、出穂後、他肥料区より生育が凋落し、収量は同等であったが玄米品質は、背白粒の発生が増加した。

（高柳善成）

##### 5) 長崎県における密苗播種・移植システムに対応した品種別育苗技術及び薬剤側条施用技術の検討

（令 4～5）

「なつほのか」「にこまる」の2品種で、5月下旬の早植栽培と6月下旬の標準栽培において、品種別育苗技術及び早植栽培における薬剤側条施用技術について検討した。早植栽培では育苗期間22日から28日の間で苗の生育、田植機搭載時の作業性、移植精度に問題はなかった。しかし、育苗期間14日では両品種とも苗の充実度が低く、苗崩れが見られた。普通期栽培では、育苗期間14日の短期育苗でも苗の生育、作業性、移植精度に問題はなかった。

密苗と薬剤側条施用の防除効果については密苗の箱施薬剤区および慣行苗の箱施薬剤区と同等のウツカ防除効果が認められ、収量等にも差が見られなかった。

（中山美幸）

#### 3. 経常研究

##### 1) 稲・麦・大豆奨励品種決定調査

（1）水稻基本調査 現地調査（昭 28～）

基本調査（生産力検定調査、同予備調査）では、普通期に27品種・系統を供試した。併せて現地調査を4か所で行い、3品種を供試した。その結果、1系統については生産力検定調査、8品種・系統については予備試験で調査を継続する。

（高柳 善成）

（2）麦基本調査 現地調査（昭 28～）

3麦種とも基本調査（生産力検定調査、同予備調査）に農研機構で育成された品種・系統を供試した。小麦は普通小麦を3系統（生産力検定「西海205号」、「中国175号」、予備「中国177号」）、硬質小麦を1系統（「西海208号」）供試した。「西海208号」はやや低収のため試験中止。他3系統については年次変動確認のため継続検討とした。

二条大麦は1系統（うるち：「九州皮84号」）を供試し、年次変動確認のため継続検討とした。

はだか麦は4系統（2条：「西海裸79号」、「西海裸糯82号」6条：「四国裸糯142号」、「四国裸糯143号」）を供試し、「西海裸79号」、「四国裸糯142号」は特性把握のため試験中止。残り2系統は年次変動確認のため継続検討とした。

（森保祐仁）

（3）大豆基本調査 現地調査（昭 50～）

農研機構及び福岡県で育成された「九州187号」、「西育5号」、「フクユタカA1号」、「ちくしB5号」の4系統を供試した。

「ちくしB5号」は「フクユタカ」より成熟期は早く、収量は同等であったことからやや有望と判断した。「フクユタカA1号」は特性把握のため供試終了とした。「九州187号」、「西育5号」については、年次変動確認のため試験継続とした。

（松葉一樹）

##### 2) 水田機能・生産要因改善

（1）稲・麦・大豆の生育診断・作柄予測（昭 46～）

①早期水稻

早期品種の「コシヒカリ」を供試し、生育経過の追跡と作柄の解析を行った。

「コシヒカリ」の生育は平年より、出穂期が4日遅く、成熟期が6日早かった。穂数と1穂粒数はやや少なく、m<sup>2</sup>当たり粒数は少なくなった。また、千粒重は平年並、登熟歩合はやや高くなり、玄米重は平年よりやや軽く480kg/10a（平年比90）になった。検査等級は2等中であった。

#### ②普通期水稲

普通期品種の「ヒノヒカリ」および「にこまる」を供試し、生育経過の追跡と作柄の解析を行った。

##### ◎「ヒノヒカリ」

「ヒノヒカリ」の生育は平年より、出穂期が2日遅く、成熟期が並だった。穂数が並、1穂粒数がやや多く、m<sup>2</sup>当たり粒数はやや多くなった。千粒重が並、登熟歩合がやや低かったため、玄米重は平年並の560kg/10a（平年比104）であった。検査等級は2等下であった。

##### ◎「にこまる」

「にこまる」の生育は平年より、出穂期が並、成熟期が2日早かった。穂数が並で、1穂粒数がやや多かったため、m<sup>2</sup>当たり粒数はやや多くなった。千粒重と登熟歩合が並だったため、玄米重は平年よりやや重い604kg/10a（平年比105）であった。検査等級は2等上であった。

（高柳善成）

#### ③麦類

小麦、二条大麦およびはだか麦の3麦種を供試し、生育経過の追跡と作柄の解析を行った。

##### （1）小麦

##### ◎「チクゴイズミ」

分げつ期以降の気温は平年より低く推移し、「チクゴイズミ」の生育は、出穂期は平年より5日遅くなったが、出穂後の気温がやや高く推移し、成熟期は1日早くなり、登熟期間は6日短かった。穂数は平年並だったが、穂長は短く、千粒重はやや軽かったことから、子実重は対平年比で94%（44.4kg/a）となった。品質は1等であった。

##### ◎「長崎W2号」

「長崎W2号」の生育は出穂期は平年より3日遅かったが、成熟期は2日早くなり、登熟期間は5日短かった。穂長は短かったものの、穂数がやや多く、千粒重は平年並だったことから、子実重は対平年比で108%（49.4kg/a）となった。検査等級は、出穂期が遅く結実期間が短かったことから充実不足により2等であった。

##### （2）二条大麦（「はるか二条」）

「はるか二条」の生育は出穂期は平年より2日、成熟期は3日早くなり、登熟期間は1日長かった。穂数が少なかったため子実重は対平年比で92%（38.6kg/a）であった。検査等級は1等であった。

##### （3）はだか麦（御島稈、長崎御島）

##### ◎「御島稈」

「御島稈」の生育は出穂期は平年より1日早く、成熟期は1日遅くなり、登熟期間は4日長かった。穂数は平年よりかなり少なかったものの、穂長は長く、千粒重は並で、結果的に子実重は対平年比で106%（32.1kg/a）であった。また検査等級は1等下であった。

##### ◎「長崎御島」

「長崎御島」の生育は出穂期は平年より1日早く、成熟期は2日早くなり、登熟期間は3日短かった。穂長が前年より短く、穂数はかなり少なく、千粒重は軽かったため、子実重は対前年比で84%（32.6kg/a）、対平年（参考）比で95%であった。また検査等級は1等下であった。

（森保祐仁）

### 3) 水稲のリモートセンシングと生育予測システムによる効率的栽培管理技術の確立（令2~5）

#### ①リモートセンシング技術の開発

水稲品種「なつほのか」についてリモートセンシングで得られたNDVI値と生育や収量の関係を検討した。

その結果、節間伸長期から幼穂形成期に実施したリモートセンシングによって得られたNDVIおよび生育量から「なつほのか」の穂肥前の適正生育量は1250、NDVIは0.55であり、その時の窒素吸収量は4.9kg/10aであることがわかった。穂肥前の生育量またNDVIを測定することで窒素吸収量を推定でき、穂肥の可否の判断に利用できることを明らかにした。

（中山美幸）

#### ②中干し時期の予測

「なつほのか」と「にこまる」の中干し時期を予測するため、複数の移植時期で生育調査を実施し、気象や調査項目との関係を検討した。その結果、茎数は葉齢と相関が高く、葉齢は出穂期を予測するDVR予測式の積であるDVIとの間に高い相関があることが認められた。

（古賀潤弥）

### 4) 硬質小麦「長崎W2号」の高品質多収かつ省力施肥栽培技術の確立（令4~7）

小麦品種「長崎W2号」について追肥重点施肥技術による収量、品質の向上について検討する。

追肥時期を通常の追肥時期より遅くした「追肥重点施肥技術」の生育に与える影響を検討するため、追肥量を変えた試験を実施し、最高分げつ期の茎数の変化を得ることができた。さらに、可給態窒素に応じた施肥量の指標を作成するため、堆肥の投入量を変えた栽培試験を実施した。今後、効率的な子実タンパク含有率の推定のため出穂期前後のNDVIを測定し、NDVIと子実タンパク含有率との関係を明らかにする。

（森保祐仁）

## 4. 行政要望課題

### 1) 稲・麦・大豆の遺伝資源管理と原原種生産

#### （1）稲・麦・大豆遺伝資源管理

（主要農作物種子対策 昭28~）

県が奨励品種及び認定品種としている主要農作物のうち水稲9品種、麦類7品種、大豆1品種を管理している。

（古賀潤弥）

#### （2）稲・麦・大豆原原種生産

令和4年産原原種は、水稲では「コシヒカリ」37kg、「なつほのか」40kg、「恋初めし」17kg、「にこまる」66kg、「山田錦」14kgを生産し、大豆では「フクユタカ」102kgを、麦類では「はるか二条」381kg、「長崎御島」79kg、「長崎W2号」329kg、「チクゴイズミ」181kgを生産した。また、原種は水稲「つや姫」321kg「モチミノリ」85kg、大豆「フクユタカ」370kgを生産した。

（古賀潤弥・松葉一樹・高柳善成）

## 5. FS研究

### 1) 麦生育期に実施する省力的な堆肥散布技術の検討 (令4)

麦の分けつ肥時期及び穂肥時期に堆肥を散布する省力的な麦生育期堆肥散布技術について検討した。分けつ時期

及び穂肥時期に堆肥を 2t/10a 散布しても麦の生育障害の発生は見られず、茎数は慣行と同等であった。今後収量や品質に及ぼす影響について調査する。

(松葉一樹)

## 【野菜研究室】

### 1. 受託研究[国庫]

#### 1) 世界初のアスパラガス茎枯病抵抗性品種の育成と世界標準品種化への育種技術開発(平30~令4)

(1) 茎枯病抵抗性系統の栽培試験

コンソーシアムメンバーが育成した有望 2 系統の露地圃場における地上部生育量と茎枯病等の発生程度および収量性の調査を行い、長崎県においても有望系統は露地春どり産地以上の収量性や高い茎枯病抵抗性を発揮することが確認できた。

(内山拓郎)

#### 2) アスパラガス生産に働き方改革を！改植技術「枠板式高畝栽培」を基盤とした省力安定栽培システムの開発 (令2~6)

省力的かつ安定生産可能な経営を実現するため、気象条件が異なる主要産地において、「枠板式高畝栽培」を実施し多収品種を選定するとともに先端技術を活用したアスパラガス栽培システムを開発する。当センターでは既存ハウスに枠板式高畝を導入し、基準品種「ウェルカム」「ゼンユウガリバー」と有望な4系統を定植し品種比較試験を実施中である。本県では、一部系統において、目標収量の 3t/10a を達成した。

(内山拓郎)

#### 3) 高精度フェノタイピングに基づくイチゴ培地レス栽培技術の確立 (令2~4)

イチゴ「恋みのり」を培地レス栽培(NFT)システムにおいて9cm ポット苗を使用し、定植苗の被覆資材の違い(不織布、給水マット、リングカルチャー法)、について試験を実施している。1月までの 10a あたりの収量は培地レス栽培の区はおおむね慣行比 70%であった。

3年間の研究で、培地レス栽培(NFT)システムにおけるイチゴ「恋みのり」の栽培特性などの知見を得ることができた。得られた知見についてはコンソーシアム内で共有し、栽培マニュアルが策定される予定である。

(峰孝介)

#### 4) いちごの輸出拡大を図るための大規模安定生産技術の開発 (令4~6)

(1) 冬春いちご「恋みのり」などによる安定生産技術・品質・収量向上

イチゴ「恋みのり」栽培で問題となっているがく枯れ果の発生機構解明およびそれに基づく対策技術の確立のため、①ポット栽培における土壌水分の違いががく枯れ果の発生に及ぼす影響について、②土耕栽培における育苗期の施肥方法による心止まり株の発生およびがく枯れ果発生に及ぼ

す影響についての試験を継続中である。

(堀田修平)

### 2. 受託研究(民間)

(1) 海外で開発された品種の比較試験

カナダで開発された全雄品種について、不耕起客土法による改植を行い、ハウス半促成長期どり条件下における定植初期の生育評価を行った。

(内山拓郎)

### 3. 行政要望課題

#### 1) ながさきオリジナル新品種開発推進事業 (令3~5)

(1) 新品種の育成

前年度までに有望系統として選抜した「NS1号」の現地適応性試験を開始し、生育、収量、輸送性について評価している。有望系統の選抜では生産力検定1年目系統から3系統を次年度の生産力検定2年目に、4次選抜は4系統を生産力検定1年目供試系統として選抜、3次選抜は5系統を選抜、2次選抜は 16 系統を選抜、1次選抜(実生選抜)は 54 個体を選抜した。

(前田 衡)

(2) 交配母本用優良系統の探索・選抜

農研機構育成系統1系統と佐賀県育成「佐賀19号」、大分県育成「大分6号」の交配母本としての適性を把握するため、「ゆめのか」を対照品種に高設栽培に定植し、現在収量・品質特性について調査を実施中である。

(前田 衡)

(3) 炭疽病強耐病性交配母本の育成

育成した炭疽病耐病性交配母本を交配親として 8 組合せで交配し、得られた実生苗から果実品質に優れる5個体を選抜した。また、本県育成の有望系統「NS1 号」の炭疽病耐病性について明らかにした。

(前田 衡)

#### 2) 農業経営改善新技術確立事業 (令3~5)

(1) いちご新品種「恋みのり」のがく枯れ症状発生要因の検討

「恋みのり」は冬季にがく枯れ果の発生が課題となっており、摘葉のがく枯れ果発生に対する抑制効果を検討した。①5枚に摘葉する区、②7枚に摘葉する区、③10枚に摘葉する区、④無処理区と4つの区を設け試験を行った。しかし、いずれの区もがく枯れ果が発生している。以上のことから、がく枯れ果の抑制効果は摘葉処理では認められず、極端な摘葉はがく枯れ果の発生を助長すると考えられた。

3月以降の生育、収量について現在試験を継続中である。

(峰 孝介)

### 3) グリーン農業産地化チャレンジ事業 (令4～5)

(1)イチゴの省エネ高収量を実現する炭酸ガス施用技術の開発

イチゴ「ゆめのか」「恋みのり」栽培において燃料の削減と高収量を同時に実現する炭酸ガス施用技術について検討している。炭酸ガスの施用方法を①換気連動制御施用、②常時連続局所施用、③常時連続施用(対照)の3水準で11月下旬から3月下旬まで処理しており、施用期間中の燃油使用量は対照比で①換気連動制御施用59%、②常時連続局所施用38%の燃油削減効果を確認した。収量・生育について試験を継続中である。

(堀田修平)

### 4) 長崎県型次世代施設園芸推進事業 (令2～4)

(1)高軒高ハウスにおけるミニトマト促成長期どり養液栽培に適する品種選定

高軒高ハウスにおいて「CF 小鈴」、「小鈴キング」、「小鈴クイーン」を9月15日にロックウールスラブへ定植した。生育、収量、品質等を調査継続中である。

(柴田哲平)

(2)高軒高ハウスにおけるトマト促成長期どり土耕栽培の株間の検討

高軒高ハウスにおいて「CF 小鈴」、「小鈴キング」を株間35cmおよび40cmで9月14日に定植を行った。株間の違いが生育、収量にもたらす影響について試験を継続中である。

(柴田哲平)

(3)ミニトマト促成栽培における温湿度管理による裂果技術の確立

温風暖房機が稼働しない時期の裂果対策を目的とし、11月に日の出前3時間に湿度が90%を下回るよう温風暖房機を稼働することで、裂果が抑制できた。引き続き、生育、収量、品質について調査しており、4月にも同様の試験を行う予定である。

(北島有美子)

(4)ミニトマト促成栽培における摘葉管理による裂果技術の確立

葉数を制限する摘葉処理が裂果や生育収量に与える影響について検討するため、10枚区、15枚区、20枚区を設定し、生育、収量、品質について調査しており、試験を継続中である。

(北島有美子)

## 【花き・生物工学研究室】

### 1. 受託研究[国庫]

#### 1) 輸出に対応した長期輸送における切り花・鉢物の品質保持技術の開発 (令3)

スカビオサ「フリフリメイ」を異なる切前で収穫し、輸出を想定した10℃・6日間の暗黒輸送シミュレーション後に日持ち調査を行った結果、早期収穫(固切)することで日持ち期間が延長した。また、早期収穫する際、輸送シミュレーション中に糖を吸水させると、開花が進むとともに花卉の発色が促進され、品質が向上した。

(渡川友里恵)

#### 2) 土壌病害における現地圃場実態調査

トルコギキョウ県内現地圃場の立枯れ株より分離した42菌株についてシーケンス解析により塩基配列相同性を評価した結果、県内の優占種は *F.oxysporum* であった。その他に、*F.solani*、*F.proliferatum*、*F.fujikuroi* と推定される菌株が分離された。*F.proliferatum*、*F.fujikuroi* はトルコギキョウに感染するという報告のない菌種であり、*F.proliferatum* については、生育適温および形態特性を調査した。今後は、*F.fujikuroi* についても特性調査を行う。

トルコギキョウ3品種に本県分離菌株を含む9菌株(*F.oxysporum*、*F.solani*、*F.proliferatum*)を接種し、発病の品種間差を調査したところ、「モンロー」が強く、「アンバーダブルモヒート」が弱い傾向にあったが、菌株によっては明瞭な品種間差が見られなかった。

(波部一平・渡川友里恵)

#### 3) 開花調節技術を活用した夏秋小ギクの需要期安定出荷体制の確立 (令4)

小ギク需要期の安定供給による市場シェア拡大を目的に、

電照による高度な開花調節技術を用いた9月彼岸施設夏秋小ギクを栽培し、後作にランタンキュラス(冬春品目)を導入し、暖地における施設花き高収益経営モデルを策定するため現地実証を行った。また、小ギクランタンキュラスの利益が最大となる最適栽培面積を算出し、施設栽培における高収益経営モデルを示した。

(鍵野優子)

#### 4) MPN-PCR法を用いた土壌中における萎凋細菌病菌の高感度定量検出法の開発 (令4)

土壌中の萎凋細菌病菌を高精度に測定する技術開発を目的として、MPN-PCR法による技術開発を行った。最適な前培養方法およびPCR条件を検討した結果、既存技術である選択培地法よりも高感度および高精度に土壌中の萎凋細菌病菌の検出が可能となった。県内のカーネーション栽培圃場において、実証試験を行ったところ、前作の発病状況と、菌密度の間に相関性が確認された。これらから、開発した手法は実用可能であると考えられた。

(波部一平)

#### 5) 画像を活用したAI花き自動栽培システムの開発改良 (令4～6)

輪ギク「神馬」において、基本栽培プログラムの作成に向け、生産者聞き取りと試験データを元に、栽培管理マニュアルの作成、栽培管理フロー図の作成を行った。また、生育診断、開花予測、圃場異常検知システム開発に向けた画像収集を行い、AIモデル作成のための学習手法の検討と画像の整理を行った。

トルコギキョウにおいても、基本栽培プログラム作成のため

の栽培の生育の推移、ドライミスト効果等検証、現地の調査を行った。

令和5年度は、試作版の長崎型環境制御装置およびかん水システムを設置し、ハウス機器の動作確認やAIモデルの精度検証、2棟制御の自動栽培実証、生育コントロールの実証栽培を行う。

(檀山妙子・久村麻子)

## 2. 経常研究

### 1) 気候変動に左右されない輪ギクの周年安定生産に向けた栽培技術の確立 (令2~5)

(1) 夏秋輪ギク「精の一世」の統合環境制御による安定生産技術の確立

土壌水分率を判断基準としたAIかん水を用いることにより、生育初期と後期において、日射量に対するかん水量には差がないことが明らかとなった。また、急な曇天の日でも土壌水分率は低下しており、かん水が必要なことが分かった。

(2) 秋輪ギク「神馬」の統合環境制御による安定生産技術の確立

栽植本数を慣行の150本/坪から166本/坪に増加させた場合、M以上の割合が同等であり、収穫本数が13%向上した。また、換気温度を30℃に上げ炭酸ガスを施用することにより、品質に悪影響なく草丈とボリュームを確保することが可能であった。

(3) 輪ギクの周年安定生産技術の確立

令和5年度は、「神馬」と「精の一世」を組み合わせた年間3.5回転の作付けを実証するとともに、生産者圃場において、「神馬」の環境制御による栽培期間短縮栽培を実証する。

(久村麻子)

### 2) 萎凋細菌病抵抗性・耐暑性を有するカーネーション新品種の開発 (平31~令5)

主要花色で商品性の高い萎凋細菌病抵抗性品種の開発

農研機構育成の萎凋細菌病抵抗性品種と長崎県育成系統を交配し、選抜した優良系統を農技センターおよび現地圃場において調査し、令和6年度品種登録出願候補として、主要花色であるピンク色でボリュームがある系統「長崎 R7-115」を選定した。さらに、萎凋細菌病抵抗性品種「ひめかれん」の枝変わりであるローズ色の「長崎 12-3-②」を選定した。令和5年度に大村市、諫早市において大規模試作し、市場評価を確認する。

(鍵野優子・渡川友里恵)

### 3) 病虫害複合抵抗性の遺伝率が飛躍的に高まるバレイショ中間母本の育成 (平31~令5)

抵抗性遺伝子を二重式に持つ系統同士の交配および選抜

昨年度、育成した各種病虫害遺伝子を二重式に持つ育成系統同士を交配して、合計2311粒の種子を獲得した。獲得した一部種子を播種し培養を行い、葉から抽出したDNAを用いて、各種病虫害抵抗性に関わるDNAマーカー検定等を行い、シストセンチュウ抵抗性等を三重式に持つと推定される12系統を選抜した。

(波部一平)

## 3. 行政要望課題

### 1) 魅力ある「ながさきオリジナル品種」開発事業

(令3~5)

(1) 輸出に対応したランタンキュラスの新品種育成

輸出に対応したランタンキュラスの新品種開発のため、センターで属間交配を行い作出した、オリジナル性の高いランタンキュラス「長崎 290313」「長崎 291417」「長崎 291210」「長崎 301704」の有望4系統を選抜した。4系統は現在流通しているランタンキュラスに少ない花色、花形であり、「長崎 290313」「長崎 291210」は、長期暗黒処理後の日持ち日数が長くなる。

(檀山妙子)

### 2) 咲き誇る「ながさきの花」産地拡大推進事業

(2) オリジナルカーネーションの優良種苗の供給

オリジナル品種登録数が増え、今後より多くの苗生産を可能にするために、昨年度より新たに愛知県のカーネーション種苗生産会社であるイノチオ・フジブランドと苗生産委託契約を結び苗の分譲をしている。また、栽培特性、管理方法等の技術支援を行った結果、苗生産技術が確立し、穂での分譲が可能となり、より省力な苗生産が可能となった。

また、八江農芸(株)には小ロット生産である「ほほえみ」を分譲した。

農技センターにおいては、県育成5品種のメリクロン苗について開花・生育調査を行い、優良メリクロン系統を選抜、維持する。

(鍵野優子・渡川友里恵)

### 3) ながさき型スマート産地確立支援事業(令3~4)

(1) きく生育予測技術の開発

秋輪ギク「神馬」において、開花作型毎に、消灯時および発蕾時の茎径から収穫時の90cm調整重を予測する生育予測式と、2Lを確保する目安となる茎径を明らかにした。また、「神馬」の生育について、草丈および葉数の増加が積算温度と非常に高い相関があることを明らかにした。

(久村麻子)